

学校名	うるま市立天願小学校
氏名	前原 博光

## 1 実践テーマ

## すべての子どもが「楽しい」学校づくり

～学びに向かう主体的な態度を引き出す「特別活動」の実践を通して～(H30～R2の実践)

## 2 実践テーマ設定の理由

私が教師として教壇に立つ際、常にテーマとして掲げていることは、「すべての子どもが『楽しい』と感じる学校にするには、どうしたらよいか」である。子どもは、学校が楽しいから、喜んで登校する。楽しいから、笑顔がこぼれてくる。楽しいから、主体的に動くようになる。「学校は楽しい」という気持ちから、全ての教育活動が充実したものになると考えている。仲間との活動を楽しみ、よりよい生活をつくっていく喜びを感じることで、授業での学びの活動、係や当番、清掃の活動など、様々な活動に意欲的になり、ひいては、学力向上にもつながっていくと考える。

現在、学校を取り巻く教育課題として話題にのぼるキーワードには、「不登校」「学級崩壊」「登校しぶり」「問題行動」「集団不適応児や特別な配慮を要する子の増加」「学力向上」…。多くの問題が取り上げられ、課題が山積している状況がある。このような課題解決の糸口となるのが、子ども一人一人の「学校は楽しい」と思える感情を引き出すことであり、教師として大切な責務の一つだといえる。

残念ながら、本校にも、私が赴任してくる平成30年度以前より、不登校で学校へ登校できない子(表1)や学校生活が楽しめず、暗い顔をしている子などがいる現実があった。在籍するすべての子が「学校は楽しい」と、笑顔で学校生活を過ごしてくれるようにするために、一人一人の居場所をつくり、集団活動(学習や生活)を楽しめる風土をつくっていくことが必要であると痛感した。

年度	人数
H28	8
H29	4
H30	4
R1	5
R2	

【表1】

また、子どもの様子を見ていると、一生懸命活動に取り組んだり、仲間と協力しながら活動する姿は見られるものの、自ら主体的に取り組んだり、仲間との学び合いを楽しみながら活動したりする姿までは、引き出せていないことも感じられた。

本県が推進している「学力向上推進5か年プランⅡ」の方策3では、学びに向かう風土(集団)づくりとして、「支持的風土のある学校・学級経営を通して発達の支援を充実させること」が示されている。これは、学力の向上には、学びに向かう主体的な態度を育てていくことも重要であり、不可欠な取り組みであるということの意味するものと捉えられる。また、本プロジェクトでは、方策3の具体的な方策として、児童の組織的な活動を大切にしたい学級活動や児童会活動の充実を図ることを通して、児童の自主的・実践的な態度を育て、個々の児童や集団における問題解決能力の高まりにつなげるようにしていくことが示されている。さらに、本市で取り組まれている「うるま市共通実践項目」の中でも、学びに向かう集団づくりの基盤として、生徒指導三機能を生かした学級経営を通して、自己有用感や他者受容感を育てていくことが明記されている。

本県や本市が求める学びに向かう主体的な姿は、集団での活動を通して、仲間とよりよくかわり合いながら、自分たちの目標(各教科における学習の目標や生活上の目標など)の実現に向け、よりよい活動をつくり出すための「見通しと振り返り」を繰り返す中で、育まれていくものだと考える。そして、その活動の中で、子どもは「よりよい活動づくりを目指そうとする主体的な態度を身につける」「集団でのよさや役割を自覚し、自分の居場所を見つける(自己有用感)」「個人や集団での目標達成の喜びを味わう(課題解決の達成感)」「仲間と認め合い協力し合いながら活動する(他者受容感)」などの経験を積み重ね、自己の成長に必要な力を高めていくと考える。

学びに向かう主体的な態度を育てるには、子どもが「やってみたい」「解決したい」と思えるような活動を仕組み、子ども自ら仲間とかかわり合いながら、自主的に活動させることが必要であり、「特別活動」がその活動を生み出す糸口になると考える。特別活動は教育課程の中で唯一、子ども主体の活動を中心とした学習活動であり、本校の実態や教育行政の方策に即した児童の発達支援を推進する取り組みが展開できるからである。特別活動が自主的、実践的な態度の育成をねらいとすることからも、特別活動の指導を充実させることで、本校児童の課題を解決する方策として有効であると考えた。

以上のことから、すべての子どもが「楽しい」と感じる学校づくりを目指し、特別活動の実践の工夫を通して、子どもが学びに向かう主体的な態度を育てたいと考え、本テーマを設定した。

### 3 実践内容と工夫（実践において工夫した点）

本実践テーマである、すべての子どもが「楽しい」学校づくりを目指した教育実践に取り組むために、以下の3つの視点で工夫を行った。

- (1) 実態把握の工夫と結果の活用
- (2) 長期的視野に立った実践計画を立てる
- (3) 校務分掌での役割を効果的に生かす

#### (1) 実態把握の工夫と結果の活用

児童・教師の姿を通じた課題を把握し、課題解決に向けた取り組みの方法を明らかにし、全校体制で共通理解のもと実践に取り組んだ。学推の取り組みと連動し、年間を通して行われる様々な実態調査の結果を集約、分析、考察を踏まえ、必要な情報を整理し、全職員へ情報発信を行った。その後、各実践への取り組みとつなげるようにした。実態把握で活用した調査は以下に示した通りである(表2)。

【表2】実態把握で活用した調査

児童の実態把握	実施	教師の実態把握	実施
◆全国学力学習調査児童質問紙結果	年1回	◆教師アンケート	毎月
◆沖縄県児童質問紙結果	年2回	◆学校評価アンケート(教師用)	年1回
◆学校評価アンケート(児童用)	年1回	◆授業の基本事項ふりかえり	年3回
◆天願チャート	毎月	◆各学期の学推のふりかえり	年3回
◆天願スタンダード振り返りアンケート	毎月	◆校内研ふりかえり	年1回
◆各学期の学推のふりかえり	年3回	◆沖縄県学校質問紙	年2回
◆校内研ふりかえり	年1回		
◆教師アンケート(児童の姿)	年1回		
◆各実践におけるふりかえり	適宜		

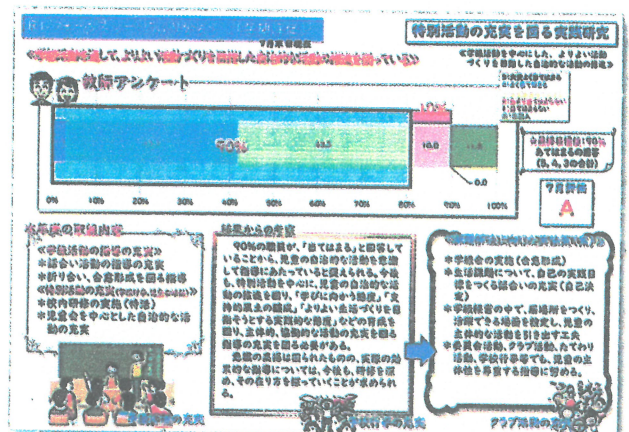
R2 学推:教師アンケート

実施年度	No	評価内容	4月	5月	6月	7月	9月
1	1	全国学力学習調査結果を教師経費・学習経費・授業に活かしている。					3
2	2	学習指導要領(学習指導要領・指導要領・指導要領)は活用している。					3
3	3	各月々の「ディスカッション」を実施している。					4
4	4	各月々大別する「関心」の調査を実施している。					4

【図1】Excelによる教師アンケート

各種アンケートの調査結果の報告は、各担任に直接 Excel ファイル(図1)に入力してもらい、集計と分析を行い、学推全大会や校内 OJT の場で、情報を共有した。(図2)  
また、国や県が実施する調査も活用し、国や県の平均と比較しながら、本校の児童の様子を客観的な視点からつかむように努めた。

#### 〔 実態調査の活用例 〕



【図2】教師アンケート結果公表、考察・改善策の提案のプレゼンスライド

(2) 長期的視野に立った実践計画を立てる

本実践テーマを実現するには、短期間では難しい。学校全体の雰囲気を変え、継続してより豊かな風土が醸成されるように、長期的、かつ継続的に教育実践が行われなければならない。そこで、課題解決に向け、実践が定着し、継続的なものにしていくように3年間という期間を設定し、実践の計画を立てた(表3)。そして、PDCA マネジメントサイクルに基づき、実践に取り組みながら、定期的に実践のふりかえりを行い、よりよい取り組みにするための工夫改善を行った。

【表3】実践計画

	H30 年度	R1 年度	R2 年度
実践の取り組み内容	子ども主体の活動づくりに向けた基盤の整備	子ども主体の活動づくりの展開	子ども主体の活動づくりの推進
	◆実態把握(課題の明確化) -----	定期的の実態を把握し、実践に活かす -----	-----
	◆指導計画の見直し -----	改善 -----	改善 -----
	◆児童の意識改革 -----	※活動の目的・目標意識を高める指導を行う -----	-----
	◆目標・課題の明確化 -----	◆目標・学校課題の共有 -----	-----
		◆児童の組織的な活動の推進 -----	児童会活動・学級活動 -----
		◆たてわり活動での指導の確立 -----	-----
			◆(*コロナ禍での)活動の創意工夫 ◆子どもによる自治的活動の推進
		◆指導の充実 -----	校内研修・校内OJT -----

(3) 校務分掌での役割を効果的に生かす

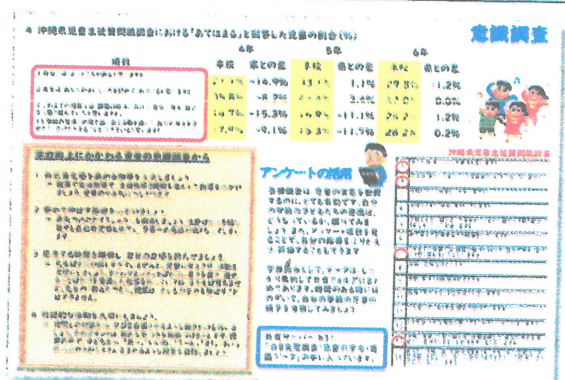
私の公務分掌は、学推担当と授業改善リーダーであることから、その役割を生かし、本テーマの実現に向け、学校全体で取り組む活動を推進していきけるように努めた。具体的には、以下の表に示した通りである。

【表4】取り組んだ実践 ※ここでは主なものを示す。

	授業改善リーダーとしての取り組み	学推担当としての取り組み
実践の取り組み内容	◆ 特別活動の指導についての情報提供 *指導技術 *指導方法 など	◆ 学推全体計画の見直し *身につけさせたい資質能力の明確化 *全校で統一した取り組みの設定 (特別活動の充実, 学級経営の充実, 学級活動の指導の充実, 異学年での集団活動の充実)
	◆ 各活動オリエンテーションの話 *委員会活動オリエンテーション *たてわり活動オリエンテーション	◆ 各種実態調査のとりまとめ *調査結果のまとめと情報の整理 *調査結果の分析と考察 *調査結果から見えた課題解決策の提案
	◆ 学級活動の授業づくりサポート *指導案の検討 *授業づくりへのアドバイス	◆ 情報提供, 情報共有 *学推だより, 授業改善だより *学推全体会での情報発信(図4)
	◆ 学級活動の授業公開 *学級活動(2), (3)の授業公開 *学級活動(1)の授業へT2として介入	◆ 学推取り組みのまとめとふりかえり *実践を通じた成果と課題を明確にする *課題解説策を次年度計画につなぐ
	◆ 児童会活動へのサポート *代表委員会の指導 *委員会活動づくりについての支援	
	◆ 特別活動担当の計画づくりをサポート	
	◆ 校内 OJT による職員への活動づくりの提案(図3)	



【図3】校内 OJT における「模擬学級会」の様子

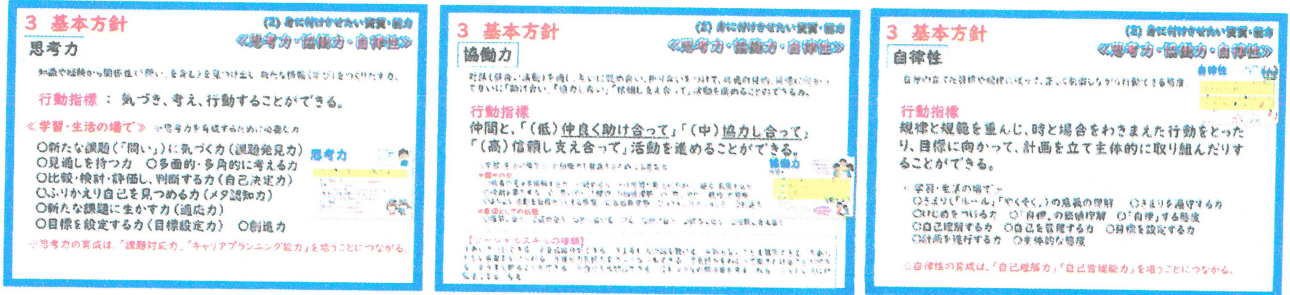


【図4】学推全体会での情報発信(プレゼン資料)

4 実践内容

(1) ねらい（本実践を通して児童に育みたい力）

本校では、平成30年度の子どもの実態から課題を見出し、学校目標（よく考え進んで考える子、明るく思いやりのある子、たくましく気力のある子）の具現化を目指すために必要な力を「身につけさせたい資質・能力」として、『思考力』『協働力』『自律性』の3つを設定した。さらに、その3つの資質・能力について、実際に身につけた姿としての行動指標や、身につけるために育成する具体的な力を指標として設定してある（図5）。



【図5】本校の身につけさせたい資質・能力

本実践で目指すところは、学校目標の具現化を目指していくことと重なると捉え、先に示した本校の身につけさせたい資質・能力の指標に基づき、本実践で身につけさせたい力を以下のように設定した（表5）。

【表5】本実践における子どもに身につけさせたい資質・能力

資質・能力	行動指標	具体的な力
思考力	気づき、考え、行動することができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○新たな課題（「問い」）に気づく力（課題発見力）</li> <li>○見通しを持つ力</li> <li>○多面的・多角的に考える力</li> <li>○比較・検討・評価し、判断する力（自己決定力）</li> <li>○ふりかえり自己を見つめる力（メタ認知力）</li> <li>○新たな課題に生かす力（適応力）</li> <li>○目標を設定する力（目標設定力）</li> <li>○創造力（創意工夫して新しいものを生み出す力）</li> </ul>
協働力	仲間と、「(低)仲良く助け合って」「(中)協力し合って」「(高)信頼し支え合って」活動を進めることができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>《個々の力》</li> <li>○他者の考えを理解する力</li> <li>○認める力</li> <li>○（仲間や集団のために）譲る、我慢する力</li> <li>○役割を果たす力</li> <li>○「思いやり」「親切」の価値理解</li> <li>○「思いやり」「親切」の態度</li> <li>○よりよい活動を目指そうとする態度</li> <li>○自己肯定感</li> <li>○コミュニケーション力</li> <li>○対話力</li> <li>《集団としての状態》</li> <li>○理解し合う</li> <li>○認め合う</li> <li>○折り合いをつける</li> <li>○助け合う</li> <li>○協力し合う</li> <li>○信頼し支え合う</li> </ul>
自律性	規律と規範を重んじ、時と場合をわきまえた行動をとったり、目標に向かって、計画を立て主体的に取り組んだりすることができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>《学習・生活の場で》</li> <li>○きまり（「ルール」「やくそく」）の意義の理解</li> <li>○きまりを遵守する力</li> <li>○けじめをつける力（時と場合にあった行動の仕方を身につける）</li> <li>○「自律」の価値理解</li> <li>○「自律」する態度</li> <li>○自己理解する力（自分のよさに気づき、自覚する）</li> <li>○自己を管理する力（自己管理能力）</li> <li>○目標を設定する力（課題解決に向けて目標を設定する）</li> <li>○計画を遂行する力（立てた計画を粘り強く最後までやり遂げようと努める）</li> <li>○主体的な態度</li> </ul>

特別活動は、実践を伴う学習活動であり、各教科領域で身につけた資質・能力を生かして実践に取り組むという特質がある。そのため、育成を目指す資質・能力は多く、一つ一つの能力が高まったかどうかという検証は難しい。そこで、それぞれの資質・能力の高まりは、各実践の中で培われ、経験重ねることで高まっていくものとして捉えることにし、本実践の成果と課題を検証するのは、子どもの意識の変容から行うこととした。子どもの意識の変容を見る内容として、国や県が実施している児童質問紙から右記（表6）の視点から検証することにした。

【表6】児童の意識変容をみる視点

No	調査項目	高まり
1	自分には、よいところがあると思いますか。	自己肯定感
2	学校に行くのは楽しいと思いますか。	満足感
3	学級の友達との間で話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。	学び合い
4	学級みんなで話し合っただめたことなどに協力して取り組み、うれしかったことがありますか。	達成感（集団）
5	あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会〔学級活動〕で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていると思いますか。	集団活動の意義

(2) 児童の実態

本校は、新築の校舎となって間もなく、環境も整備されたきれいな学校である。子どもたちの姿からも、明るく素直な子が多く、活発に活動する様子が見られる。平成30年当時、学校のよさについて、子ども、職員の声をまとめた「学校自慢」には、「学校がすごくきれい」「6年生が、みんなのあこがれである」「明るく元気いっぱい」「みんな仲よし」といった言葉が挙げられ、各行事や体験活動、様々な教育活動など、楽しい学校生活が手に取って見えるような、素敵なことばが並んだ。

しかし、学校の課題は、「ない」と捉えていいのだろうか。学校課題は、各種実態調査の結果から見えてくる。H29年度の全国学力学習状況調査の児童質問紙の調査結果から、次のような課題があがってきた。

「学校に行くのは楽しいと思いますか。」の問いに、「当てはまる」と肯定的に答えた児童の割合は、県平均県平均を下回っていた(表7)。この結果から、本校の子どもたちは、学校生活に対して満足感を感じている子の割合が少ないことが分かる。どの子も「学校が楽しい」思えるような魅力ある学校づくりを進めていく必要があるという視点は、この調査結果が起点となった。

「自分には、よいところがあると思いますか」の問いに、「はい」と肯定的に答えた児童の割合は、前年度からの改善傾向にあるとはいえ、県平均と10P近くの開きがあり(表8)、自己肯定感が低いことがうかがえた。この結果から、自主的な活動や協働の場を意図的に設定し、活動のよさを認め合い、承認される経験を増やしていけるように、指導していくことが必要であることが見えてきた。

「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」の問いに、「できている」と肯定的に答えた児童の割合は、こちらも、県平均と8.5Pの開きがあり(表9)、学び・育ちの実感が乏しく、協働的な学びが機能していないのではないかと考えられた。このことから、目的意識と振り返りを大切にされた指導を行い、話し合いを通じた活動経験を多く積みませ、子ども自身が成長を実感できるような活動になるように、指導の工夫改善していく必要があることが分かった。

「学級みんなで話し合っただめたことなどに協力して取り組み、うれしかったことがありますか」の問いに「ある」と肯定的に回答した児童の割合は、H29年度には前年と比較し、大幅な向上がみられ(表10)、学級みんなで生活上の課題解決に向けて取り組み、達成感を味わった経験が増え、自主的活動の雰囲気が高まっていることがうかがえた。そのよさを継続、発展させ、さらに集団としての達成感を味わわせる体験を積み重ねること、主体的に学び合える風土がさらに醸成されると考えた。

「学級会などの話し合いの活動で、自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いをつけたりして話し合い、意見をまとめていますか」の問いに、「当てはまる」と肯定的に答えた児童の割合は、半数以下で県平均を下まわっており(表11)、話し合いの進め方や折り合い納得した合意形成の仕方等に

学校に行くのは楽しいと思いますか。

	H28	H29
本校	88.9%	86.8%
全県	87.0%	86.4%
差	1.9%	0.4%

【表7】

自分には、よいところがあると思いますか。

	H28	H29
本校	63.2%	65.6%
全県	74.0%	74.8%
差	-10.8%	-9.2%

【表8】

学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。

	H28	H29
本校	48.7%	54.6%
全県	65.3%	63.1%
差	-16.6%	-8.5%

【表9】

学級みんなで話し合っただめたことなどに協力して取り組み、うれしかったことがありますか。

	H28	H29
本校	73.5%	84.4%
全県	81.8%	83.6%
差	-8.3%	0.8%

【表10】

あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていると思いますか。

	H28	H29
本校	50.4%	43.0%
全県	59.9%	46.2%
差	-9.5%	-3.2%

【表11】

対する理解が浅いこと、話し合いを通じた自治的活動の経験が不足していること等の課題が明らかになった。このことから、話し合い活動についての指導の在り方を見直し、子どもに話し合い活動についての意義理解を深めさせ、実践を通して合意形成する体験を積ませていくことも必要であることが分かった。

また、子どもたちの日ごろの活動の様子や会話からも課題が見えてきた。委員会活動は、よりよい学校づくりに向けて、日常的に取り組む重要な活動である。子どもたち自身が「よりよい学校づくりを目指して取り組む活動をしている」という意識を持って主体的に活動してもらいたい。ある日、掲示委員会の仕事に取り組んでいる子に「委員会でごんばっていることは何ですか。」と声をかけると、「掲示物を校舎にはることです。」と返ってきた。「学校をもっとよくするために工夫していることはありますか?」と問い返すと「何だろう・・・」と声を詰まらせてしまった。子どもの多くは、与えられた当番的な活動は、役割をこなそうと、ごんばって取り組んでいるが、よりよい学校づくりを目指して自分たちで創意工夫しながら、活動に取り組むことは意識していないという実態が見えた。「子どもは主体性がない」「常に支持待ちである」と捉えるのではなく、教師が、「学校をよりよくするための活動をしよう」という意識を児童から引き出せていないのであり、教師が指導について、工夫改善を図っていく必要があると考えた。

児童会役員は本来、よりよい学校づくりに向けて、企画立案し、運営していく大切な役割を果たす。「よりよい学校づくり」を目指し、自分の掲げた公約を果たすべく、児童会の中心となって積極的に活動に取り組む姿を求めたい。朝のあいさつ運動に取り組んでいる児童会役員の子どもの「児童会役員として、ごんばっていることは何ですか?」と問かけると「朝の『あいさつ運動』です。」と返ってきた。「あなたの選挙公約は何ですか?」と問い返すと「何だったかな・・・。」と考え込んでしまっていた。児童会役員が、あいさつ運動に励むのはいいが、本来の「学校をよりよくするための企画・運営」を担う役割をこなすことができていない現状があった。このような状況では、児童会役員に立候補したとき、「〇〇のような学校にしたい」という思いを公約に掲げたことの実現は、難しい。このような実態から、児童会の組織や役割を改めて見直し、児童会役員としての活動が有効なものになるように委員会組織の見直ししていく必要があった。

実態調査や子どもの活動の様子から見えてきたことをまとめると、自治的な活動の機能が弱いということが明らかとなった。具体的には、児童会役員があいさつ運動に終始した活動を行っている、各委員会の活動が当番的な活動中心の実践になっている、児童朝会の発表は創意工夫が見られず、自己紹介と委員会からのお願いのみの内容になっている等、活動が形骸化してしまい、子ども主体の魅力ある活動として組織が機能しない状況になっていた。これでは、子どもが主体となり、創意工夫を凝らして学校をよりよくするために取り組むことは難しい。また、児童会活動の基盤となる学級活動の実践の様子からも、学級会などの話し合い活動の場が少なかったり、係活動がマンネリ化し当番的な活動中心の活動になっていたりする様子も見られた。加えて、6年生を中心とする、縦の学年間のつながりも弱く、高学年がお手本となり、異学年のよさを生かした活動の機会も乏しい現状があった。

特別活動では、子どもが主体となり、仲間との協働を通じた活動の中で、自分の居場所を見つけ、仲間との絆を深めつつ、課題解決に向けての話し合いを通して、創意工夫しながら課題解決に向けて取り組んでいく。児童会活動を機能的に展開することで、子どもは、互いのよさを認め合い、学校への誇りを実感するとともに、一人一人の成長を実感し、自己肯定感も高まっていくと考える。そこで、見えた課題を解決すべく、子ども自ら「自分たちの手で、楽しい学校をつくっていく!」という意識を引き出し、子どもが主役の、創意工夫できる活動が展開できるように、指導の在り方を見直ししていくことにした。

**【児童の実態から見えた課題の解決策】**

- (1) **楽しい学校づくりの推進**  
\*どの子も「学校が楽しい」思えるような魅力ある学校づくりを進めていくこと。
- (2) **自己有用感、自己肯定感を高める指導**  
\*協働の場において、活動のよさを認め合いながら活動する中で、一人一人の居場所をつくり、承認される経験を増やしていく。
- (3) **目標達成の喜びを味わわせる**  
\*所属する集団の中で、共通の目的に向かって話し合い、協働的に活動する経験を積み、個人や集団での目標達成の喜びを味わわせていくこと。
- (4) **特別活動の指導スキルの向上**  
\*子どもの自治的な活動づくりにかかる教師の指導スキルを高め、特別活動の指導を充実させること。

(3) 実践の実際

◇子ども主体の活動づくりに向けた基盤の整備(H30年度の取り組み)

まず、子ども主体の活動を推進していくための指導の工夫改善に向け、当初の目標を、「児童会活動を自治的な活動へシフトする」ということにした。子どもの主体的な活動が実現したとき、思いや願いの実現に向けて、がんばっている自分たちの姿を自覚することができたり、仲間との協働を通して所属感を味わったりすることで、児童の「自己肯定感」の向上にもつながることを意図したものである。児童会活動が活性化することで、学級活動を充実させることにも波及していき、「学校が楽しい」という気持ちが増えてくると考えた。

具体的な方策として、次年度に向け、「組織体制や役割分担など、指導計画を見直すこと」、「児童の意識を改革し、活動への見通しを持たせること」の視点で改善を図った。

《指導計画の見直し》

指導計画の見直しは、特活主任を中心に、児童会担当、委員会担当と一緒に進めた。「これまでの委員会活動が、活動のめあてを達成できる活動になっていない。」「活動が形骸化し、例年通りの活用や当番的なもの中心になっている。」などの課題を改善していくために、活動の目的と、活動内容について、各種委員会の活動を一つ一つ見直しを行った。大切にすることは、活動の目的をはっきりさせることである。目的がぶれてしまうと、活動自体が「やらなくてはいけないもの」として、マンネリ化してしまい、自治的な活動につながらない。そこで、一つで示されていた活動のめあてを、創意工夫する活動と当番的な活動に分けて示し、活動内容を整理した(図6)。

《組織体制の見直し》

さらに、児童会役員が、児童会の運営の活動に従事できるように、あいさつを担う役割として、「オアシス委員会」を新設置するなど、児童会組織体制を見直した。また、特別活動全体を見直し、子どもに様々な集団での活動経験異学年で交流できる「たてわり活動」を導入した(図7)。

子どもの主体的な活動を生み出すには、教師の適切な指導が不可欠である。そこで、職員会議において、全職員で委員会活動、学級活動、クラブ活動、たてわり活動など、特別活動の場で、子どもが創意工夫できる活動づくりを目指し、自治的な活動として機能するような指導をしていくことを共通確認した。加えて、特別活動の指導方法について、校内 OJT や校内研修の中で指導事例や授業実践(図8)を紹介し、指導の方向性を確認し合った。

**課題解決へのStanding** 2 学校課題の解決に向けて  
 ◆子ども自ら、創意工夫できる活動へ  
 「自分たちの手で、楽しい学校をつくっていく！」

◆指導計画を見直す(組織体制・役割分担など)

H30 学校経営計画より  
 委員会活動一覧表(平成30年度)

《課題》  
 ◆活動のめあてを達成できる活動になっていない。  
 ◆活動が、形骸化し、例年通りの活用や当番的なもの中心になっている。

※創意工夫した活動へ移行するために、目標を見直す  
 委員会活動一覧表(平成31年度)

活動のめあて	活動内容	人
児童会活動 ①学校生活の改善 ②児童会活動の活性化 ③児童会活動の活性化 ④児童会活動の活性化	児童会活動の活性化 児童会活動の活性化 児童会活動の活性化 児童会活動の活性化	
委員会活動 ①委員会活動の活性化 ②委員会活動の活性化 ③委員会活動の活性化 ④委員会活動の活性化	委員会活動の活性化 委員会活動の活性化 委員会活動の活性化 委員会活動の活性化	

【図6】活動のめあての見直し

**課題解決へのStanding** 2 学校課題の解決に向けて  
 ◆子ども自ら、創意工夫できる活動へ  
 「自分たちの手で、楽しい学校をつくっていく！」

◆指導計画を見直す(組織体制・役割分担など)

異学年交流  
たてわり活動

教師の指導の方向性を共通確認

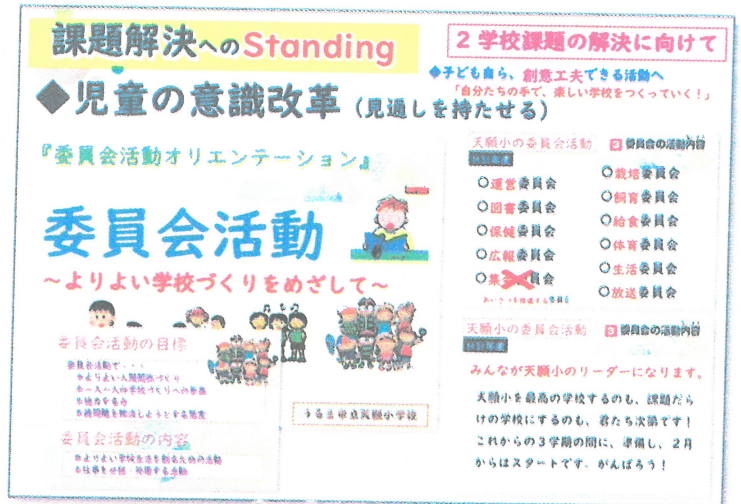
【図7】全体計画の見直し



【図8】校内 OJT: 学級活動(2)の公開授業

《児童の意識改革》

次年度を見越し、児童会の中心となる5年生に、委員会のオリエンテーションを実施した(図9)。その中で、児童会の組織について確認し、委員会活動のねらい、各活動を担う委員会の組織とその活動内容を伝え、リーダーとして自覚を持って、活動できるように、心の準備をすることの大切さを伝えた。児童は、このオリエンテーションを通して、5年生終盤からスタートする委員会において「こんな活動がしたい」という具体的な目標の設定と、活動に対する見通しを持って臨む児童の姿が見られた。



【図9】委員会オリエンテーション活用スライド】

《目標・課題の明確化》

子どもの主体的な活動の中心となるのが児童会役員である。その児童会役員に、「どんな学校にしたいのか(目標意識)」「どんな活動を行っていくのか(目標実現の方法)」「そのために、やるべき役割は何か(役割意識)」を明確に持ってもらうことは、大切な指導の一つである。児童会役員選挙(図10)に向け、役員に立候補した子どもたちと児童会の役割をしっかりと確認し、自分がつくっていききたい学校の姿を、選挙公約としてはっきり示すように指導を行った。そして、この選挙公約は、児童会役員としての一年間、活動に取り組んでいく「道しるべ」となるように、児童会室に掲示し、自分の立てた選挙公約を自覚させるようにした。



【図10】児童会役員選挙の様子

また、新委員会活動を担う5年生に対し、これまで活動に取り組んできた6年生から、「できたこと」「できなかったこと」「後を引き継ぐ5年生へ期待すること」をしっかりと伝えてもらい、活動のバトンを引き継いでもらった。そして、新しい児童会活動をスタートする引継ぎの時期に、子どもが主役の活動へのシフトのチャンスとして位置づけ、新たな気持ちで委員会活動の臨む5年生に、1年後の姿をイメージさせて、活動に対する自分の目標や活動への計画など、大まかなビジョンを描くように指導を行った。

◇子ども主体の活動づくりの展開 (R1年度の取り組み)

令和元年度には、子ども主体の活動づくりを目指し、「子どもたちによる楽しい学校づくり(子どもが主役の学校づくり)」をスタートさせた。この1年間は、以下の3点に重点を置き、特別活動の指導の充実を図っていくことにした。

- (1)目標・学校課題の共有
- (2)児童の組織的な活動の推進
- (3)たてわり活動での指導の確立



《目標・学校課題解決策の共有》

年度当初、新児童会役員に、それぞれが示した選挙公約を整理し、協力し合って児童会（運営委員会）として今年度目指す学校の姿として3つに絞らせた。子どもたちが決めた目指す学校の姿は、「笑顔いっぱい楽しい学校」「互いに協力し合える学校」「生き物や植物を大切にする学校」である。これが、本年度（R1年度）の児童会活動の「道しるべ」として、全ての活動の目指す目的となり、全校児童で目指していくものになる。

児童会役員で決めた3つの姿は、児童朝会の

場を使って、全校児童に紹介させた（図11）。全校児童に知らせる場を設けることで、全ての児童会活動の目的となる指標を全校児童が確認することができ、共通の目標に向かって活動していく姿につながると考える。

また、昨年度までは、生活朝会に、生徒指導主任による天願スタンダード（学校のきまり・約束）について確認していたことも、児童会役員に取り組ませた。子どもたち自ら、自分たちの選挙公約と結び付け、「よりよい学校にしていく」という目的で、全校児童に天願スタンダードを説明し、きまりや約束を守ることでいい学校を目指そうと呼びかけをした（図12）。自分たちの手で、学校の課題を解決していこうという意識を持たせるとともに、主体的によりよい生活づくりに取り組んでいこうという雰囲気づくりにもつながった。

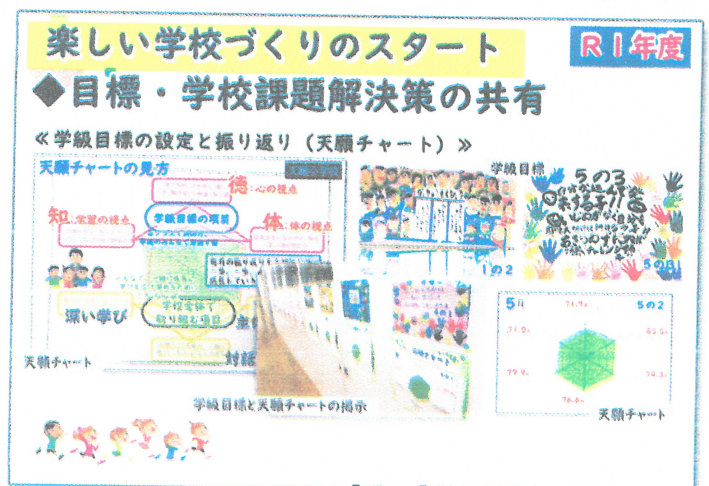
各学級においても、全学級統一した取り組みとして、学級目標づくりに取り組んだ。年度当初、子ども一人一人の「〇〇なクラスにしたい」「こんな〇年生になりたい」と願いや思いをキーワードとして出し合い、学級みんなで1年間目指していく目標としてまとめた。その目標を各教室に掲示し、意識づけるとともに、学級経営の中心に据え、指導の拠り所として活用した。また、学級目標を、毎月の生活アンケート項目に取り入れ、自己評価させて、児童一人一人が、自分の生活を見直すきっかけづくりも行った。さらに、集団として、共通の目標に向けてよりよい生活を目指していく態度を育てるために、集団の成長を可視化し、評価できる「天願チャート」を活用した集団のふりかえりにも取り組んだ。毎月、「天願チャート」を使って学級の仲間と一しょになってふりかえり、次の月に、クラスで頑張っていくことを決める（目標づくり）につなげた（図13）。各学級での取り組みが、よりよい学校づくりの基盤として、児童会として目指していく学校づくりに結びついていくものだと考えている。



【図11】児童朝会：目指す学校像の紹介



【図12】児童朝会：天願スタンダード説明



【図13】学級目標と天願チャート

《児童の組織的な活動の推進》

○委員会活動の活性化（創意工夫した取り組みへの移行）

委員会活動のねらいを、「よりよい学校づくりにむけて、創意工夫して実践すること」として示したことによって、各委員会の活動も、創意工夫した魅力ある取組に変わってきた。

新設されたオアシス委員会は、児童朝会の場を使って、「あいさつを活発にしよう」と呼びかけ、学年対抗のあいさつトーナメントを実施した。体育館の中は、元気な「おはようございます」の声につつまれ、子どもたちの顔からは、笑顔があふれ出していた。また、生活委員会は、全校児童に落とし物や、傘の片づけ方など、寸劇を取り入れたクイズで、望ましいものの扱い方について考えさせるように働きかけていた（図14）。保健委員会は、先生方の身長を調査し、身長比への掲示をしてみたり、図書委員会は、自分たちで選んだ絵本の読み聞かせを行ってくれたりしていた（図15）。

このように、委員会活動が、当番的な活動から、よりよい学校づくりをめざした創意工夫した楽しい活動へとシフトしていった。子ども達の意識を変え、「よりよい活動をつくっていこう」とする気持ちを引き出したのは、言うまでもなく担当の先生方の努力と指導の工夫改善があったからだと考える。全職員で特別活動の目標や指導法について学んだり（校内研修等にて）、指導の在り方を共通確認したり（職員会議等にて）することで、各委員会を担当する教師の意識が変わり、子どもの話し合いを通して、楽しい活動をつくることを目指した実践に結びついたと考える。

○運営委員会の役割変更と活動の充実

運営委員会（児童会役員）の朝の活動も変わった。これまでは、毎年恒例の行事に向けての代表委員会の運営以外は、「あいさつ運動」に励んでいたが、組織・役割を見直すことで、話し合いの時間が生まれた。児童会役員の子どもたちは、毎朝、目指す学校の姿に近づくために、どんな活動を、どのように行っていくか、互いの考えを出し合いながら話し合って実践する取組を決めていった（図16）。そうすることで、児童会の活動が豊かになってきた。

児童会役員が企画したのは、全児童に、投票を呼びかけ、得票数の多い作品を天願小のキャラクターをきめることだ（図17）。応募作品の中から選ばれたのは、「願くん」というキャラクター。最終選考に選ばれたお友だちには、児童会手づくりの賞状が授与された。決定した「願くん」は、天願小学校のマスコットとして、活躍中である。

話し合いを重ね、活動の計画を十分練って取り組む経験を通して、児童会役員の子たちは、どんどん主体的に活動に取り組むようになっていった。毎年恒例の、運動会や学習発表



【図14】創意工夫した委員会の取り組み



【図15】創意工夫した委員会の取り組み



【図16】朝の運営委員会の活動



【図17】学校キャラクター募集

会、募金活動などの取り組みに向けて、代表委員会で話し合う際も、各学級から出た意見についての思いを大切にしながら、上手に整理し、お互いが納得できるように話し合いながら、合意形成を図るように努める姿が見られた(図18)。

代表委員会で話し合われたことは、各学級の代表から、それぞれのクラスのみならず伝えられ、代表委員会で話し合われた思いを共有する形で、各行事に臨む子どもたちの姿があった。

### ○学校行事を盛り上げる

児童会役員の活動や各委員会の活動が、楽しく豊かな活動になっていくと、学校行事への取り組み方も変わってくる。運動会に向けた児童の取り組みでは、6年生を中心に全校児童が、運動会を成功させることを目指して主体的に活動する姿が見られた。

まず、各学級で、どんな運動会にしたいか話し合ってもらい、その思いを集約する形で代表委員会でスローガンを決定した。さらに、児童会役員は、全校児童が一つになってダンスをすることで、チームに関係なく天願小学校全員が団結してほしい…との願いから、オリジナルの「天小ダンス(図19)」を考え、全校児童に教えた。児童会役員の主体的な取り組みが、全児童に伝わった実践である。

運動会では、特別に応援団という組織を結成させる。児童会種目「大玉転がし」と応援合戦があり、応援団はその際に、応援の中心となって運動会を盛り上げる役目を担うのである。応援団は、全児童に応援の仕方をレクチャーした。紅白に分かれたチームで、互いに創意工夫した応援方法を考え出し、一生懸命応援練習に励んでいた。応援団の練習も、後述するたてわり活動と連動させ、たてわり活動を運動会練習の日程の中に組み込むことで、6年生が下級生をリードして、応援の練習を行うことができた。この、たてわり活動の時間に、応援団、たてわり班の6年生が中心となって「応援合戦」の総合練習をするのである。また、児童会が作った「天小ダンス」を練習する場にもなった。この場を設けることで、各組が、優勝を目指してがんばろうという雰囲気がつくられ、チームが団結していく様子が見られた。

各学級でも、運動会に向けた取組について話し合いが行われ

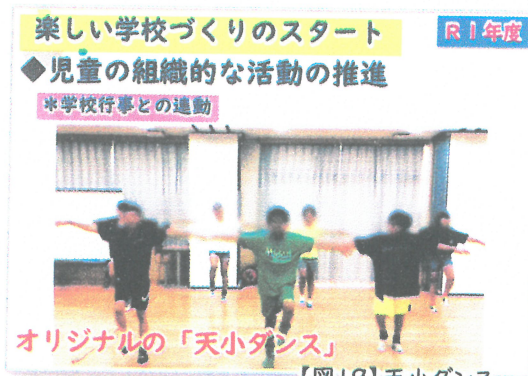
た。運動会を成功させるためにどんなことをやりたいか、「感動」「協力」「絆」の視点

で、考え、チームの掛け声、クラスの団結旗、円陣を組むなどの実践を合意形成を図りながら決めていた(図21)。

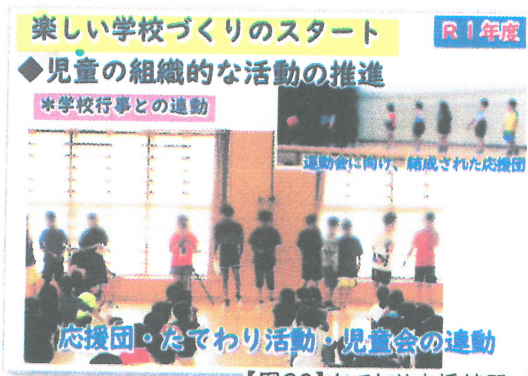
運動会本番では、子どもたちの生き生きと活動する姿があちらこちらにあった。6年生は運動場の中央で円陣を組み(図22)、みんなで



【図18】代表委員会で話し合いの様子



【図19】天小ダンス



【図20】たてわり応援練習



【図21】各学級での運動会に向けた学級会の様子



【図22】円陣を組み団結する6年生

運動会成功に向けて、気合を入れる掛け声をかけていた。この姿は、下級生にとってもあこがれの対象として映ったはずである。応援団も頑張っていた。団長を中心に、応援合戦では、大きな声をはりあげ、元気いっぱいに応援する子どもたちの姿があった(図23)。応援団は、テント前でも大活躍(図24)。下級生をリードして、応援を盛り上げた。大玉転がし、応援合戦後には、全校児童で天小ダンスを披露した。学校全児童が一つになる瞬間であった。

このように、運動会では、子ども一人一人の思いをこめたスローガンのもと、力を合わせて、行事を成功させようと一生懸命に取り組む子どもたちの様子があちらこちらで見られた。中でも、6年生がいきいきと活動し、下級生をリードしている姿は、感動的であった。児童会、応援団などの児童会組織と各学級をうまくつなげ、活動の場を工夫することで、全校児童がスクラムを組み、活動に主体的に取り組む姿を引き出すことのできた実践であった。

〇つながりづくり

児童会を組織的に機能させていくためには、つながりも重要だと考える。児童会の中心となって活動している6年生にとって、下級生とのつながりを意識することは、活動をより活性化することにつながるからである。

2学期末には、委員会活動でがんばっているお兄ちゃん、お姉ちゃんに向けて、下級生から「ありがとうのメッセージカード」を募集し、掲示した。掲示されたメッセージに目を通し、笑顔になる6年生たち。この取り組みをきっかけに、上級生として、よりよい学校づくりに向け、委員会活動に主体的に取り組む雰囲気が高まっていった。

《たてわり活動での指導の確立》

本校の課題には、子どもの縦のつながりが弱いことがあった。そこで、たてわり活動を導入し、異学年交流の場を設定することで、学年間のつながりをつくり、楽しい学校づくりを目指していこうと考えた。学校を楽しいものにするためには、仲間と力を合わせながら楽しい活動づくりを実現すべく、自分たちで考え、決めて、実践していくことが大変有効である。その活動を、異年齢集団で行うことで、上級生には、リーダーシップを、下級生にはフォローシップを育てることができる。たてわり活動は、仲間とのよりよい関係をつくる、班の一員として、楽しい生活づくりに協力する、自分たちで活動を考え、計画し、実践する、のねらいの下、年4回実施した(図26)。

これまでにない取り組みとなるため、きめ細やかな実施計画作成し、全職員との指導計画について打ち合わせを十分に図るため、校内OJTや校内研修、職員会議を通して、活動のねらいや進め方、教師の指導などを共通確認した。その後、子どもにも各学級で、たてわり活動の目的や活動内容、スケジュールなどを丁寧に確認するオリエンテーションの場を設け、指導を行った(図27)。



【図23】応援合戦の様子



【図24】テント前の応援



【図25】ありがとうのメッセージ

第2回 たてわり活動 実施計画

1 目的  
 ◎たてわり活動を通して、学校への所属感を育み、所属する集団(班、運動会)への所属感・連帯感を高める。  
 ◎運動会に向け、全児童で力を合わせ、行事をつくりあげる達成感を味わわせる。  
 ◎児童の絆を深める(ねらい)  
 (高学年)活動への見直しを持ち、下級生へ優しく接し、活動に責任をもって運営することができる。  
 (中低学年)仲間と協力して、楽しんで活動に参加し、楽しむことができる。

2 日時  
 ○ 9月20日(金) 5校時 : 学級活動

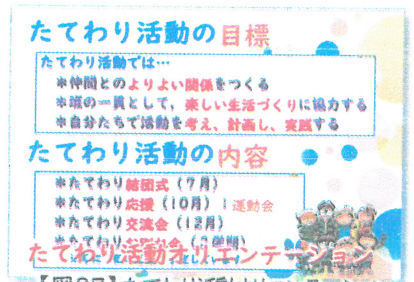
3 活動場所  
 ○ 職員室/たてわり班各教室  
 ○ 全学級/体育館  
 ※事前話し合い活動場所を確認してください。(特に低学年)

4 活動の内容 (左記参照)

5 事前指導  
 たてわり活動の意義、活動内容、目標などについて、事前指導をお願いします。  
 クラスの手供達に、自分の所属班や活動学級、活動の流れなどを知らせ、確認して下さい。  
 体育館での全学級練習は、前事後まで入れ替えを行います。スムーズに移動できるように、縦横両端に対応をお願いします。

時間	内容	留意
13:50~(5分)	体育館へ移動	◎活動班へ移動
14:00~(20分)	応援練習「全体」 ◎応援団のリードで練習します ◎応援団のリードで練習します ◎ダンスの練習(6年生の科挙本) ◎グループ練習 ◎班全体で合わせる(2-3回)	◎出陣暗号(連中) ◎ダンスの練習(6年生の科挙本) ◎グループ練習 ◎班全体で合わせる(2-3回)
14:20~(5分)	◎活動班へ移動	◎活動班へ移動
	応援練習「連中」 ◎出陣暗号(連中) ◎ダンスの練習(6年生の科挙本) ◎グループ練習 ◎班全体で合わせる(2-3回)	◎応援練習「全体」 ◎応援団のリードで練習します ◎ダンスの練習(6年生の科挙本) ◎グループ練習 ◎班全体で合わせる(2-3回)

【図26】たてわり活動実施計画



【図27】たてわり活動オリエンテーション

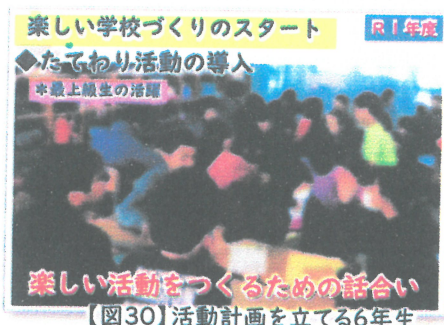
実践当日は、各班に分かれて、6年生を中心とした楽しい活動づくりの実践を行った(図28)。たてわり活動では、実践場所が限られている。そこで「決定した場所の中で、1年生から6年生まで楽しめる遊び」という条件のもと、6年生に活動の計画を立ててもらい、実践につなげた。各班では、教室で風船バレーを楽しんだり、運動場でハンターをして汗をかいたりするなど、創意工夫した活動が見られた。1年生から6年生まで一緒になって遊ぶ経験は、なかなかできないので子ども達にとって、貴重な体験の場となった。教室内で「じゃんけん列車」に取り組んでいる班の様子(図29)をのぞいてみると、みんな笑顔。楽しい活動を作ってくれた6年生に感謝とあこがれが芽生えてくることが想像できた。活動終わりに、1年生が「たのしかったー。またやりたいな」とつぶやいて、教室へ戻る姿が印象的であった。



【図28】たてわり活動当日の様子



【図29】じゃんけん列車で楽しむ子どもたち



【図30】活動計画を立てる6年生

楽しい活動を支えるのは6年生。6年生は班のリーダーとして、事前にどんな活動を行うのか、どの様に進めるのか等、活動の計画づくりの事前準備が必要となる。下級生のことを考えつつ、どうすれば楽しい活動になるのか、仲間と相談しながら計画を立てる様子から、上級生としての自覚がうかがえた(図30)。

たてわり活動実践日には、それぞれがリーダーとなって、所属班の活動の運営をリードする。この経験が、6年生一人一人を大きく成長させていく。活動がつまったり、困ったことがおきると、話し合いを行う。その際も、6年生が中心となる。困っている下級生にやさしく声をかける上級生の姿(図31)。上級生について、活動に主体的に取り組もうとする下級生。たてわり活動の回数を重ねる度に、集団の絆も深まっていくのを実感する実践であった。学校になかなか足が向かないHさんが、たてわり活動の日には登校し、活動に参加した後、「あ～楽しかった。」とつぶやいたことが心に残った。



【図31】下級生を優しくリードする

#### ◇子ども主体の活動づくりの推進 (R2年度の取り組み)

残念なことに、令和元年度の終盤となる2月末、コロナウィルス感染症の拡大に伴う学校の臨時休校が決定した。本来なら、1年間のしめくりとして、活動のふりかえりを行い、次年度のスタートに向けて準備する大切な時期である。さらに、臨時休校は、5月のゴールデンウィークまで続き、万全な状態で新年度のスタートも切ることができない状況であった。令和元年度にスタートした子ども主体の活動づくりを目指した「子どもたちによる楽しい学校づくり(子どもが主役の学校づくり)」の実践も、思うようにふりかえりからの引き継ぎができないままの今年度のスタート。令和2年度は、計画修正を余儀なくされ、教師にとっても、子どもにとっても、試行錯誤しながらの取り組み運営となった。

#### 《(※コロナ禍での)活動の創意工夫》

コロナ禍の中、新児童会役員もがんばっている。新しい生活様式に沿った感染症対策を講じながら、工夫し

て活動をスタートさせた。コロナの影響で、始業式や終業式、全校集会や児童朝会など集合して実施できない。そこで、児童会役員の子どもたちは、校内放送を活用し、パワーポイントによるプレゼンテーションで全校児童に呼びかけることを発案した（もちろん児童会担当教師の指導の成果でもある）。全校児童に向け「行事のあいさつ」や「公約紹介」「天願スタンダードの」について、協力してプレゼン用のスライド作成の準備を進め、初めて取り組む校内放送を活用したプレゼンテーションをしっかりと成功させることができた（図32）。

休校明け、かわいい1年生が入学してきた。恒例の1年生を迎える会を行うかどうか、職員会議でも議論になったが、担当の先生の熱い思いと、子どもたちの「1年生を歓迎してあげたい」をいう願いを受け、方策を何度も検討し、「換気を十分行う」「マスクを着用する」などの感染対策を十分に講じた上で、入れ替え制で出し物を行うことで実現することができた（図33）。教師にとっても、子どもにとっても、これまでと方法が異なるやり方で行事を実施することはなかなか大変なことである。しかし、「1年生を喜ばせたい」「楽しい学校にしたい」という思いや願いが不可能を可能に変えた実践となったと考える。

#### 《子どもによる自治的活動の推進》

新児童会は、新たな活動を企画に取り組んだ。昨年度選ばれたキャラクターを活用した「願くんを探せ」という企画である（図34）。先輩から受け継いだ企画を実現させようと、新児童会で計画を練ったものだ。校舎のあちこちに隠れている「願くん」が持っている文字をつなげて、言葉にする。見事正解したお友だちには、図書貸出券が贈呈される。これも、図書委員会とのコラボレーションである。コロナ禍の中、活動を制限され、なかなか楽しい活動に取り組めない中、創意工夫をして活動をつくろうと、仲間と知恵を出し合って活動を生み出したのである。

また、楽しい学校づくりに向けた取り組みは、各学年や学級でも行われている。コロナの感染拡大状況を見極め、活動が制限される中、どんな活動をしたらよいか考え、様々な活動の工夫を行い実践している。5年生は、各クラスの代表が実行委員となり、学年イベント「5年生天願ピック」を計画し、クラス対抗のバレーを実現させた。また、3年生は、学年イベントに向けて、各学級で協力して活動に取り組み、スポーツ大会を成功させた。4年生は、学級イベントをみんなで話し合い、計画実践していた。

コロナ禍においても、楽しい学校生活をつくろうと工夫していく、子どもたち。本校の児童会室には、今の児童会役員の選挙公約をまとめた目指す学校の姿が掲示されている。3つの姿の実現に向けて、児童会役員、各種委員会が最上級生とし下級生をリードし、楽しい活動づくりを進めている。コロナ禍において、子どもたちの思いの実現に向けた活動づくりを行うことは、大変な苦労や困難があるが、限られた条件下のもと、今だからこそできることを、子ども達と一緒に考え、実践に結び付けていこうとする教師の姿が本校にはある。本校の児童会担当の先生をはじめ、子どもたちをご指導下さっている担任の先生方に感謝である。



(4) 児童の変容

本実践に取り組む中で、児童の意識が次第に変わっていった。実践に取り組む以前のH29年度と実践に取り組んだ令和元年度、令和2年度の全国学力学習状況調査の児童質問紙の調査結果の比較からは、次のような変容が見られた。

「学校に行くのは楽しいと思いますか。」の問いに、「当てはまる」と肯定的に答えた児童の割合は、実践に取り組む前と比較し、増えたことが分かる。また、R2年度には県平均県平均を10P上回る結果となった(表12)。この結果から、本校の子どもたちは、学校生活に対して満足感を感じている子の割合が増えたことも分かる。「学校が楽しい」思えるような雰囲気が少しずつ高まってきていると考える。

「自分には、よいところがあると思いますか。」の問いに、「はい」と肯定的に答えた児童の割合は、H29年度は県平均より10P近くも低かったが R1年度、R2年度とポイントが向上し(表13)、自己肯定感の高まりがみられた。自治的な活動や協働の場を設定したり、活動のよさを認め合わせる活動の中で、承認される経験が増え、仲間と主体的に活動に取り組んだりすることにより、充実感や自分のよさの気づきにつながり、自分に自信がついてきたことがうかがえる。

「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。」の問いに、「できている」と答えた児童の割合は、実践前は県平均と比較し、9P近くも下回っていたが、実践に取り組んでからは、年々ポイントの向上が見られ、県平均を上回る結果となった(表14)。仲間との協働を通じた活動づくりの中で、個々の学び・育ちの実感が高まってしていることが分かる。協働的な学びが機能するような教育実践ができてきたと考えられる。また、目的意識と振り返りを大切にした指導を行い、話し合いを通じた活動経験を多く積ませることで、子ども自身が成長を実感できるような活動になってきたことが見て取れる。

「学級みんなで話し合っただめたことなどに協力して取り組み、うれしかったことがありますか。」の問いに「ある」と肯定的に回答した児童の割合は、H29年度から県平均を上回っていたが、実践にとりくんでからもさらに向上している(表15)。これは、学級の仲間と生活上の課題解決に向けて取り組み、達成感を重ねた結果だと捉えられる。このことから、学校全体に自治的活動の雰囲気が高まり、主体的に学び合える風土がさらに醸成されてきた成果だと考えられる。

「学級会などの話し合いの活動で、自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いをつけたりして話し合い、意見をまとめていますか。」の問いに、「当ては

学校に行くのは楽しいと思いますか。

	H29	R1	R2
本校	86.8%	93.2%	88.9%
全県	86.4%	87.4%	78.9%
差	0.4%	5.8%	10.0%

【表12】

自分には、よいところがあると思いますか。

	H29	R1	R2
本校	65.6%	84.1%	86.2%
全県	74.8%	78.1%	78.9%
差	-9.2%	6.0%	7.3%

【表13】

学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。

	H29	R1	R2
本校	54.6%	72.7%	77.6%
全県	63.1%	67.4%	76.0%
差	-8.5%	5.3%	1.6%

【表14】

学級みんなで話し合っただめたことなどに協力して取り組み、うれしかったことがありますか。

	H29	R1	R2
本校	84.4%	87.2%	88.8%
全県	83.6%	80.8%	81.5%
差	0.8%	6.4%	7.3%

【表15】

あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていると思いますか。

	H29	R1	R2
本校	43.0%	78.0%	86.2%
全県	46.2%	71.3%	82.7%
差	-3.2%	6.7%	3.5%

【表16】

まる」と肯定的に答えた児童の割合は、実践前は5割以下であったが、R2年度には、2倍の86.2%まで高まった(表16)。全校統一した指導体制をつくり、話し合いの進め方や折り合い納得した合意形成の仕方等の指導方法を学び合い、指導実践にいかしたことが要因であると考えられる。子どもの姿からは、学級活動の機会が増えたことや合意形成の仕方などを、経験を通して学んだことがこの結果につながったと考えられる。

普段の活動からも、子どもが主体的に取り組む姿が見られるようになってきた。委員会や係活動など、やるべき仕事に限らず、よりよい学校生活づくりにつながる、創意工夫した活動に取り組んでいました。それは、特別活動指導に関して教師の意識の高揚が図られ、子どもの思いや願いを実現させるために、子ども主体の活動づくりに積極的にかかわっていきこうとする雰囲気が高まってきた成果だと捉えられる。また、児童会活動をリードする6年生の姿も大きく変わった。児童会役員が中心となって公約の実現を目指して、主体的に活動するようになってきた。それに触発され、他の委員会活動でも、創意工夫した取り組みを企画・実践することが増えてきた。また、学級活動の実践の様子も変わってきた。どの学級でも、学級会などの話し合い活動の場を積極的に設け、自分たちの学級をよくするために、合意形成を図りながら実践方法を決めていく様子が見られることがふえてきた。係活動も創意工夫した活動に積極的に取り組んでいきこうとする様子も、職員同士の情報共有の話題の中で上がってきた。さらに特筆されることは、たてわり活動に取り組むことで、6年生を中心とした、縦の学年間のつながりができてきたことである。高学年がお手本となり、異学年のよさを生かした活動の展開が図られ、子どもが生き生きと活動し、笑顔で実践している姿がみられるようになってきた。

## 5 成果と課題

本実践を通して、以下の成果と課題がみられた。

### 《成果》

- 特別活動に関する指導の在り方についての学びを深め、実践に結びつけることができた。
- 組織的に取り組むことで、指導体制を整え、共通した実践を推進することができた。
- 学級経営を充実させ、子どもによる自治活動を見守る姿が見られるようになってきた。(陰で支える教師)
- 長期的な計画を立てることで、PDCA サイクルに基づき、学校の教育活動の一環として定着しつつある。
- 楽しい学校生活づくりにおけた様々な取り組みを、子どもたち自身の手でつくることができた。
- 協働した集団活動を通して、互いに認め合い、支え合ったり、助け合ったりする姿が増えてきた。
- 自己肯定感、自己有用感、達成感、などが高まり、学びに向かう意欲が高まってきた。(児童質問紙より)
- 特別活動の様々な活動を通して、登校しぶりや不登校ぎみの子たちも、参加する姿が見られた。

### 《課題》

- 実践の質には、教師間の差が見られ、さらに学びを深め、指導技術の向上を図る必要がある。
- 特別活動担当、児童会担当、6年担任などに負担が集中したため、全職員での協力体制を高め、「全ての教師で子どもを育てる」という意識で取り組んでいく必要がある。
- コロナ禍の活動など、計画したことができない状況下の柔軟な対応ができるような体制づくりを行う。
- 活動が継続的に発展していけるような指導体制を構築することが必要である。
- 低学年での話し合いの活動の経験を増やし、中学年以降、自分たちの手で活動づくりに向けて主体的に活動ができるように、確実にその力を育てる必要がある。
- すべての子どもが、「学校が楽しい」といえるようになるまで、楽しい活動づくりをつなげていくことが必要である。

### [結びに]

本実践は、完結した実践ではない。次年度の活動につなげ、さらに工夫・改善を図っていく必要がある。天願小学校が H30年度より取り組んできた実践の足跡(記録)として残し、さらによりよい学校づくりをめざして、全職員で子どもの笑顔があふれる学校にするために取り組んでいけることを祈願する。